

フィールドワークに基づく農業・農村地理学研究の方法

—カナダの農村空間の商品化, 日本農業の存続・発展戦略, 日本の農業地域区分—

田林 明

筑波大学名誉教授

本稿は2013年以降に筆者が実施した「カナダの農村空間の商品化」と「日本農業の存続・発展戦略」, 「日本の農業地域区分」という三つの研究課題に関する調査・研究の体験を通して, フィールドワークに基づく農業・農村地理学の手順と方法を再考した。三つの研究課題に関する調査・研究は相互に密接に関連しており, それぞれ「伏線」, 「着想・準備」, 「実行」, 「反復」, 「展開」の5段階を踏んだことが確認できた。研究を持続するには, フィールドで考えフィールドから発想するという基本的な姿勢が不可欠である。外国との比較, 応用的側面の導入, 小地域での研究成果を広い地域の研究課題に広げること, 長期にわたる調査・研究の継続の必要性がわかった。フィールドワークの手順としては, 既発表のものに加えて, 研究者同士の連携や被調査者の人権への配慮, 調査者と被調査者の良好な人間関係の確立とともに, 研究成果の調査地域への還元が重要である。

キーワード: フィールドワーク, 農業・農村地理学, 農村空間の商品化, 存続・発展戦略, 農業地域区分

I はしがき

農業・農村地理学においては, 研究対象地域において景観を観察し, 聞き取りやアンケート調査などをしてオリジナルな情報を入手するフィールドワークを行い, それに基づいて研究を進めることが重要である。農業・農村地理学の具体的なフィールドワークの方法については, 例えば矢嶋(1958)や中野(1960), 市川(1985)をはじめとして多くの文献がある。それらでは準備, 予察的研究, 文献資料の検討, 実地調査, 整理などの手順が詳細に説明されている。それでもフィールドワーク全般の進め方や, それに基づく研究全体の枠組みをいかに構築していくかという点についてはわかりにくいところもある。個々の研究課題にかかわるフィールドワークに加えて, 研究者がどのようにその課題を着想し, それに具体的に取り組み, 結論を導きだし, 発展させ, さらに別の課題に取り組んでいくかという一連の過程を提示す

ることが必要であろう。その試みの一つが梶田ほか(2007)によってなされている。地理学者が研究人生のなかでいかに研究を進めてきたかについては, 阿部(2011)や藤田・阿部(2014)など興味深い成果がある。しかしながらフィールドワークとそれに基づく地理学的研究は, 依然として個人の経験や感性に負うことが多く, いわば「ブラックボックス」化されているとも言える(村山, 2014a)。このような状況を改善するために村山(2014b)は, フィールドワーク方法論の体系化を試みるプロジェクトを実施した。

その一環として筆者は, 1990年代と2000年代に実施した「持続的農村」と「農業の維持形態」, 「農村空間の商品化」という研究課題を取り上げ, フィールドワークを重視した研究の方法と手順を整理した(田林, 2014b)。これは主として日本における農業集落程度の小地域の詳細なフィールドワークの結果とそれを積み上げるものであった。さらには国内と同じ水準の丁寧なフィールドワー